エルムは，ケンとマヤにも黄色い花の蜜を数滴分けてくれました。花の蜜は甘くてとてもいい香りがしました。マヤは，

「いい香りね，私の好きな香りだわ。」

と言い終わるか終わらないかのうちに花びらに唇を寄せて蜜を吸い込みました。けれど，ケンにはどうしても好きになれない香りだったので，

「ぼくは止めておくよ。それよりこの森の草花を見てごらん。僕らの街にはない植物がたくさんあるよ！！」

と興奮しながら森の中へと歩いて行きました。

ケンは行く道みちでマヤに話しかけました。しかし，暫くしてマヤからの返事がないことに気づきました。森の中でケンのマヤを呼ぶ声がこだましました。

「マヤ！マヤ～～！」

でも，マヤの姿はどこにも見当たりませんでした。ケンは急に一人になった寂しさが胸に込み上げてきました。

「そうだ，エルム！エルムに聞いたら何か分かるかもしれない。」

そう思いケンは，

「エルム！エルム！」

と叫びました。ケンの声は森じゅうに響きました。すると，エルムの声がかすかに聞こえてきました。ケンは，その声を頼りに森の中を探し歩きました。

すると，見た事もないような数えきれない蝶々の群れに行き着きました。群れの真ん中にはエルムが居て，その隣には虹色に輝く美しい蝶がいました。ケンはその蝶の美しさに見とれていました。すると，

「どうしたのですか。」

とエルムが聞いてきました。ケンはハッ！と我に返り，

「エルム，実はマヤの姿がどこにも見当たらないんだ。」

と話しかけました。するとエルムはとても落ち着いた声で，

「マヤはあなたの目の前にいるじゃないの。」

と言いました。ケンは自分の目の前を見ました。

「ふざけないでくれよ。マヤの姿なんかどこにもいないじゃないか。」

「ケン。」

とマヤの声がしました。それは，エルムの横に居た美しい虹色に輝く蝶だったのです。